

消防の未来を託す新人はどう作り上げるか? がんばる新人と、新人を育てる先輩たちを大特集。

2013年5月10日発行通巻63号

消防・防災・レスキューの専門マガジン

# J-RESCUE

A MAN WHO SAVES ANOTHER MAN'S LIFE IS A TRUE HERO.

# 5

## 「全国新車速報」 スペシャル版

誌面を大幅に拡大して、  
最新車両を多数掲載。  
全国初の仕様も必見!

### DETAIL UP!

水槽付消防ポンプ自動車 I-A型  
(佐野地区広域消防組合消防本部)

救助工作車 II型  
(大月市消防本部)

資機材搬送車(支援車 II型)  
(藤沢市消防本部)

May  
2013 Vol.63  
隔月刊・偶数月10日発売  
定価1200円

「小田原市消防本部」  
新体制スタート  
神奈川県西部2市5町の  
消防広域化プロジェクト

特集

# 最強の新人

# をつくる

人を助ける  
スペシャリストは、  
どうやって  
誕生するのか?



# 「ゆとり世代」の取扱説明書 カリスマ教官・鎌田流

約9年の消防学校教官経験を持ち、現在は消防大学校の消防体育講師を始め、全国の消防学校で講師を務める鎌田修広氏が、いまどきの若者の教育法を指南する。



1969年3月 神奈川県生まれ。  
1993年横浜市消防局入局。現場、予防課、そして9年間の消防訓練センター教育課を経て、2011年5月に人材育成と消防体育の普及をライフワークに(株)タフ・ジャパンを設立。カリスマ(刈り上げ&スマイル)教官として、消防大学校を始め、各地の消防学校等で心と体づくりの講師を務める。著書に、消防官必携本として評判の「消防筋肉」(イカロス出版刊)がある。(写真◎岩田伸久)

全国の消防学校で採用!  
「消防筋肉・タフで優しい心・体をつくる実践的トレーニング」  
著・鎌田修広(発行/イカロス出版 B5判・1600円)



## 1 「ゆとり世代だから」「最近の人は」を口癖にしてはいけない

上の世代目線で若者を見ると、つい思ってしまった、言ってしまったがちなのが、「最近の若者は」「ゆとり世代は」ということだが、私は言わないだけでなく、そう思わないように心がけている。そう言った瞬間に、若者たちは「なーんだ、他の人と同じようにしか見てもらえないんだ」と心のシャッターを閉めてしまっただけ。そうなったら、後から教官が生懸命指導しても、心に届かなくなってしまう。

何よりも、一人ひとりに対する先入観をできるだけ持たないようにすることが大事ではないか。人の関わりの中でも最初が非常に大切で、そこで先入観を持って見ると真の姿を見逃す可能性もある。毎年自分は各職員の履歴書を必要最小限だけ見て、その人の背景はあまり気にせず、自分が見たまま、感じたままにその人を捉えるのだ。中には、環境が変わるのを機に、自分を変えようと張り切っている新人もいる。その心意気を削ぎ

たくないのだ。

また、初任科の約半年間には失敗も含め学生一人ひとりに様々な物語がある。それをすべて、卒業後に配属される所属に伝えようと、噂はあつという間に広がる。それが悪い噂だと、すぐに所属の先輩方から「うちに入ったの最悪だよ」という目で見られてしまっただけ、新人のやる気の芽を潰さないためにも、先入観は持たないで一人ひとりと向き合おうのだ。

## 3 学生の「はい」を疑ってかかる

消防学校初任科生の「はい」は基本的に信じてはいけない。返事だけが良いが、蓋を開けてみたらほとんど分かっていなかった、という事は珍しくない。

私は毎年、授業の初期段階で、学生たちに「わかったか?」と投げかけ、「はい」と返事してきた後に、「本当か?」「本当か?」「本当なんだな?」と5回ぐらい念を押す。すると、「すみません、本当はわかっていません」と大多数が手を挙げてくる。学生達にはその場を取り繕い、卒業する頃になつて実は全然理解できていませんでした、で

は取り返しがつかない事を話すのだ。

「それは消防人として止めよう。わからないのは、いいんだ、当然なんだから。周りの雰囲気になれないで、分らないものは分らない、と勇気を出して手を上げなさい」と。

また消防学校を卒業後、隊に配属されてからも、先輩の指示や命令をわかつたふりをして復唱さえもし

## 4 「笑い」で身体能力を引き出す

専門である体育の授業で、私は心がけてリラックスした環境を作っている。体育に限っては、怖い雰囲気、怒られないように、怒られないようにと思ってしまうと、筋肉がガチガチに硬直して、思うように動かなくなる。

すると成果がぐいぐい出てくる。消防学校では大体1500メートル走を行っているが、そのタイムで4分台はかならず早い方。通常は、陸上部やサッカー部の足の速い学生達ぐらいで100人中でも5人ぐらいだが、鎌田流のトレーニングを続けたクラスは、半年後には学生の約6割が4分台になるほど能力を引き出した実績がある。基礎体力で成果が出ると、自信もつき、体の使い方が上手になるので、実科の授業でも怪我をしにくくなるというメリットがあるのだ。

## 2 教育の基本は、どんな時でも目を見て1対1

消防も部隊の中では1対1での指導が行われているが、消防学校で学生が50人、100人となると、1対50、1対100で、一度で全員に分かるようにと大声を張り上げる。これは誰もがやりがちなことで、どんなに人数が多くなつても、一人ひとりを見ていかないと、気づいたら誰も分かっていなかった、という事態に陥ることもある。限られた時間で、一人ひとりが理解しているかを確かめながら教えていくのは大変だが、新人に限らず教育は目を見て1対1が基本なのだ。

そこで、意図的に脱力させるため、前の授業担当教官から面白い情報を聞いていたら、そのことをネタにして笑わせ、リラックスした雰囲気をつくる。そして目を閉じた呼吸法で頭を切換えさせ、リラックスした雰囲気の中で集中して訓練を

リットがあるのだ。

## 「真似る」には 技術が必要。 ポイントとは「意味」の説明

技術習得といえは、教官やベテラン隊員が「お前によく見ておけよ」と活動を展示するのを見て覚え、先輩のやっていることを真似しながら学ぶものであったが、「ここがなかなか伝わらない。活動つとつてもその過程を細分化して説明し、さらにビデオでもう一度見る。例えば100メートル走なら、スタート、初走、中盤、フィニッシュと行動分析して説明しないと理解が難しい。映像はビデオで何度でも繰り返し見られるという教育に慣れているので、本物を二回見て覚えるという技術が不足しているのも事実。

また、私の授業を受けた学生からの感想で最も多いのが、「深い意味を教えてくださいましたので、素直に頭に入り、信頼して実技に臨めた」という大変有難いコメント。例えば効果測定がある実技の授業で、教えるべきツールが大量にあるからと、ただ使用方法だけを教えていると、そのうち学生達は「効果測定のためだけに覚えるのは面倒くさい」とさらさら覚えるのも意味ねーよ」と思い始めてしまうのだ。それを、こんな思いで開発された最良のツールで、皆にとつてこういう場面で役に立ち、さらに市民はそれを待ち望んでいる……2ヶ月後には〇〇が現場で必ず使うから、だから今ここでやるんだ！などとまず学生の関心を引きつけ、学生が「あ、そうなんだ！」と頭でイメージして腑に落ちる部分まで説明しないと、吸収できない。いかに学生の感情をうまくコントロールするか、全国の教官が苦勞している部分なのだ。

## 6 できるだけ学生と関わる

教官の役割を「教育指導」と考えると荷が重い、「その人の能力をいかに引き出すか」と考えると、人材育成が面白いと感じる。そのためには、既述のとおり一人ひとりの個性に合わせてアプローチの仕方を変えていかなければならないが、それはなかなか容易なことではない。しかし、消防学校は全寮制で、消防署所は当直スタイルという教育にもつてこの素晴らしい環境なのだ。授業以

外の時間、食事を一緒に食堂で食べたりにして学生達との時間を極力共に過ごせば落ち込んでいた学生の様子を遠くから確認してみたり、悩みがありそうだったらさりげなく近くでご飯を食べて話を聞いたりすることができると、学校では学生達は夜もトレーニングルームで自主トレをしているが、そこでも私は離れたところで一人ストレッチをしつつも、学生達の様子をみている。その時間で、

## 自分のことを好きになる

全国各地の消防学校で学生達に「今の自分は何か？」と質問すると、多くの学生が30点、良よくても50〜60点程度と自己評価が低い。自分に自信がなく、嫌いな人が意外と多いのだ。しかし、自分のことが好きでなければ、生んでくれた親に感謝することもできないだろうし、他人を好きになる事など出来ない。そのような考え方で果たして他人に手を差し伸べることが出来るのか、自分の身を守り、部下を指導していくことができるのだろうか。消防は人と関わり、生命・身体・財産を守る職業であるからこそ、自己を肯定し、どんな状況でも自分を信じて能力を発揮できる心の安定が求められる。

学生達が自分のことを好きになるには、劣等感などを持っている場合、今のままで充分、ありのままの自分を受け入れるという思考に導いてあげなければならぬ。「余裕力」とも言うが、50点から100点を目標すのでは一生100点とはれない。同じ50点UPだとしても、今の自分の評価を100点と思い、そこから150点を目指す思考に変えてみるのだ。今の自分が合格点と思えば気が楽になり、100点を越えたい分が「余裕力」となつて助けを求めている方々に優しく手を差し伸べることが出来るという訳だ。

では、どうすれば思考を変えることができるのか？  
私の手法の1つは、徹底的に「手」を使って人と関わらせること。入校時の測定を基に体力錬成ペアを組ませ、そのペアを卒業するまで変えない。すると、大抵一度はもめ事が勃発するが、それでもペアを変えず、乗り越えながらトレーニングを続けることでリアルな人間関係が形成される。結果、卒業時にお互いの苦手な分野が克服され、体力が向上すれば、自信にもなるし、自分

授業だけでは見えてこない部分が見えてくるのだ。

また私の場合は、学校に特別に許可を得て、学生が解放される金曜の夜、特に予定のない学生達を誘って軽くトレーニングや卓球、バドミントンなどの有志の集いを実施していたことがある。「訓練呼集」などから解放された時間を、授業以外の体育で楽しく過ごせば、自然と人柄が見えてくるものだ。

# 最強の 新人を つくる

特集

注意！ やってはいけない  
安易な「ほめて育てる」

最近「ほめて育てる」のが教育の主流と思われがちであるが、表面的に褒めるやり方は、消防学校初任科においてはあまりお勧めできない。実績に伴うのであれば、その事を褒めることは良いが、表面的に褒めても、実力が伴わなければ、卒業後に配属された隊でガツーンと叱られることになる。その結果、消防学校の半年に及ぶ教育が意味のないものになってしまうのだ。褒める教育、叱る教育など、教育技法にも時代の流行があるが、大事な軸は変わらない。学生がどんなタイプか知り、お互いの上下関係だけではなく、絶対的信頼関係を築いた上で、学生の「やる気の導火線にどうやって火をつけるか」が重要なのだ。その子がやる気になるのであれば、そのための手法は無限度であり、人の可能性も無限度に広がる。だからこそ教育は難しい反面、贅沢で面白いのだ。